

高性能コンクリート採取試験実技審査基準

認定試験は、JISの記載内容および内規により審査を行います。特に下記の実技ポイントを注意して下さい。

	試料採取 JIS A 1115 (フレッシュコンクリートの試料採取方法)
1	採取した試料を一様になるまで練りませぬ。
	温度測定 JIS A 1156 (フレッシュコンクリートの温度測定方法)
2	容器(直径、深さ14cm以上)を使用する場合は、2ℓ以上採取する。
3	温度計は、中央に垂直に検温部が隠れるまで挿入する。(一輪車の場合は端から7cm以上離す。)
4	試料が温度計に密着するように、試料表面を軽くならす。
5	安定を確認し、挿入した状態で測定する。測定は採取から5分以内に行う。
6	記録は、1℃単位で記録する。
	スランプフロー試験 JIS A 1150 (コンクリートのスランプフロー試験方法)
7	水密性平板は水準器等で水平及び平滑さを確認する。
8	スランプコーン及び平板は試験前に湿布などでふく。
9	試料の量はほぼ等しい量の3層(各層約1.8ℓ)に分けて詰める。
10	各層は突き棒で、5回一様に突く。2層目以降の突き入れ深さは、前層に達するまでの深さで、底を突かない。
11	3層目はあふれる程度詰め、突き棒で突いた後、コンクリート上面をこてで、上端に合わせならす。
12	試料を詰めてる途中及び詰め終わってからは、コーンを動かしたり、下部から漏れたりしてはいけない。
	詰め始めてから、詰め終わるまで2分以内で行う。
13	コーンを垂直に引き上げる(コーンを回してはいけない)。
14	引き上げは30cmの高さまでを2～3秒とする。
15	引き上げと同時にストップウォッチをスタートさせる。
16	コーンについてるコンクリートの垂れが、終わるまでコーンを持ち上げたままにする。
17	流動停止は、指を置いて確認しながら、全てが停止したらストップウォッチの停止ボタンを押す。
	停止時間は、0.1秒単位で記録する。
18	フローの測定は最大とその直交方向を1mm単位で測定し、平均値は5mmまたは0.5cm単位で記録する。
	ノギスの読み方に注意：0点および目量確認。メジャー計測は、アングル等補助器具を必ず使用する。
19	両直径の差が、5cm以上場合は再試験を行う。
20	材料分離抵抗性(均一性)を、目視で確認する。
	分離あり：中央部：骨材が偏在 周辺部：ペーストや水が偏在
	空気量試験 JIS A 1128 (フレッシュコンクリートの空気量の圧力による試験方法－空気室圧力方法)
	JSCE-F513 (高流動コンクリートの空気量の圧力による試験方法)
21	容器内およびフタを、湿布などでふく。
22	試料の量はほぼ等しい量の3層に分けて詰める。
23	各層を突き棒で、10回一様に突く 突き入れ深さは、ほぼ前層に達するまでの深さ。
24	突き穴がなくなり、大きな泡が見えなくなるように、容器の側面を5回程度木づちなどでたたく。
25	3層目は少しあふれる程度詰め、水平確認後、容器からあふれた試料を定規でかきとって平たんにならす。
26	容器のフランジの上面とフタのフランジの下面をキレイに拭き取る。
27	容器のふたは、空気がもれないように対角線状に締め付ける。
28	空気ハンドポンプで初圧力よりわずかに大きくする。
29	約5秒後に調整弁で、指針を初圧力の目盛に正しく一致させる。。
30	圧力計の針を安定させるため、圧力計を軽くたたき、指針を初圧力の目盛に正しく一致させる。
31	全ての弁を閉じていることを確認する。
32	約5秒後、作動弁を十分開く。
33	容器の側面を木づちでたたき、再び、作動弁を十分に開く。
34	0.1%単位で読み取り、記録する。
	供試体の作製 JIS A 1132 (コンクリートの強度試験用供試体の作り方)
35	採取した試料を一様になるまで練りませぬ。
36	コンクリートは、ほぼ等しい高さの2層に分けて詰める。各層の高さは、160mmを超えないように詰める。
37	各層は、突き棒で、5回一様に突く。突き入れ深さは、前層に達するまで突く。
38	型枠の内側側面にグリース等を用いて検印紙表面をあわせて貼り付ける。
39	各層は、突き穴がなくなり、コンクリート表面に大きな泡がみえなくなるように、型枠の側面を木づちなどでたたく。
40	型枠の上端より上方のコンクリートは取り除き、表面を注意深くならす。
	試験時間
41	開始宣言から終了宣言まで20分以内で試験を行う。